戦略的創造研究推進事業
（社会技術研究開発）
令和２年度研究開発実施報告書

ＳＤＧｓの達成に向けた共創的研究開発プログラム

シナリオ創出フェーズ

「認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による

共創のシナリオ策定」

研究代表者　　内田 直樹

（医療法人すずらん会たろうクリニック

院長）

協働実施者　笠井 浩一

（福岡市保健福祉局高齢社会部認知症支援課

課長）

目次

１．研究開発プロジェクト名 2
２．研究開発実施の具体的内容 2
２‐１．目標 2
２‐２．実施内容・結果 4
２‐３．会議等の活動 16
３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況 17
４．研究開発実施体制 17
５．研究開発実施者 19
６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など 21
６－１．シンポジウム等 21
６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など 21
６－３．論文発表 21
６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表） 21
６－５．新聞報道・投稿、受賞等 21
６－６．知財出願 21

１．研究開発プロジェクト名

認知症包摂型社会モデルに基づく多様な主体による共創のシナリオ策定

２．研究開発実施の具体的内容

２－１．目標

（１）目指すべき姿

日本全体で認知症当事者が増え続けている。特に大都市部では今後、高齢単身世帯の急増が予想されており、中でも、福岡市は、高齢者を含む世帯（※2015年国勢調査における「65歳以上の世帯員のいる核家族世帯数」と「高齢単身世帯」を足し合わせた世帯数を指す）に占める高齢単身世帯の割合が42.3 %と、政令指定都市20都市の中でも2番目に高く、ひとりで暮らす認知症の人が直面している多様な生活課題に対応していく必要がある。

認知症の人が多数となる社会は、人の長寿命化に伴う必然である。そのため、「みんなの認知症」と認識して、疾病や障害を治療することで問題解決を図る「医学モデル」に加えて、社会の関係性や環境を変える「社会モデル」によるアプローチが必要である。これら多様な生活課題に対応するには、「支援するーされる」の関係に基づく対処では限界がある。その際に地域レベルで解決すべき社会課題は、支援者・企業等と認知症に関わる人との対話に基づく新しいサービス創造の基盤づくりである。既存調査（国際大学 グローバル・コミュニケーション・センター/認知症フレンドリージャパン・イニシアチブ「認知症の人にやさしいまちづくりガイド」）によると、認知症の人の活動交流が減る理由の大部分に、企業のサービスや活動が関わっている。

こうした課題意識のもと、福岡市では、認知症フレンドリーシティを目指しており、認知症の人と一般企業も含めた多様なサービス提供者による共創の場の検討が進められている。このような多面的な課題に、多様な関係者とともに取り組む上で、既存の認知症に対する捉え方を越えて共創に取り組める基盤が必要となる。しかし、医療福祉の文脈を越えて認知症に関する共創を実現するための効果的な方法論・場の在り方といった仕組みが確立されていない。

そこで、本研究開発プロジェクトを通じて、認知症を包摂する新しい社会モデルと、それを推進するプロセス技術（方法論、場等）を構築することで、ひいては高齢者が暮らしやすい社会づくりに役立つ共創のためのシナリオを確立・普及したいと考える。

本プロジェクトが目指すSDGs達成のビジョンは、「支援するーされる」という関係に固定される傾向がある認知症対処社会からの脱却し、認知症の人を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人と共創できる社会を「認知症包摂型社会」として、その実現を目指すことである。この認知症包摂型社会は、具体的な課題（例えば外出困難、認知症の人の就労等）の解決を目指そうとするとき、常にその根底に潜在している認知症を取りまく関係性の課題に着目する。こうした関係の刷新は「みんなの認知症」の視点でむしろ課題を新しい視点から見直し、より本質的な課題解決策を多様な関係者で共創していく基盤となる。そうした社会のあり方が、最終的に認知症フレンドリーなまちの実現を促していくものと考える。

さらに今回はここに共創的アート活動という表現手段を取り入れ、凝り固まった関係

性を崩し、弱者とされている認知症の人をエンパワメントすることを目指している点は、認知症当事者を含めた従来の関係者側の意識変革を促し得る。

（２）研究開発プロジェクト全体の目標

○認知症当事者を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人たちと共創できる関係性を備えた社会を「認知症包摂型社会モデル」として設定する。そして、本研究プロジェクトでは、その社会像の実現にむけて、多様な主体が新しい価値に基づくサービス等の共創ができるようにするためのプロセス技術（方法・行程・評価基準等）を明らかにして、それらを地域に実装していくためのシナリオを策定する。

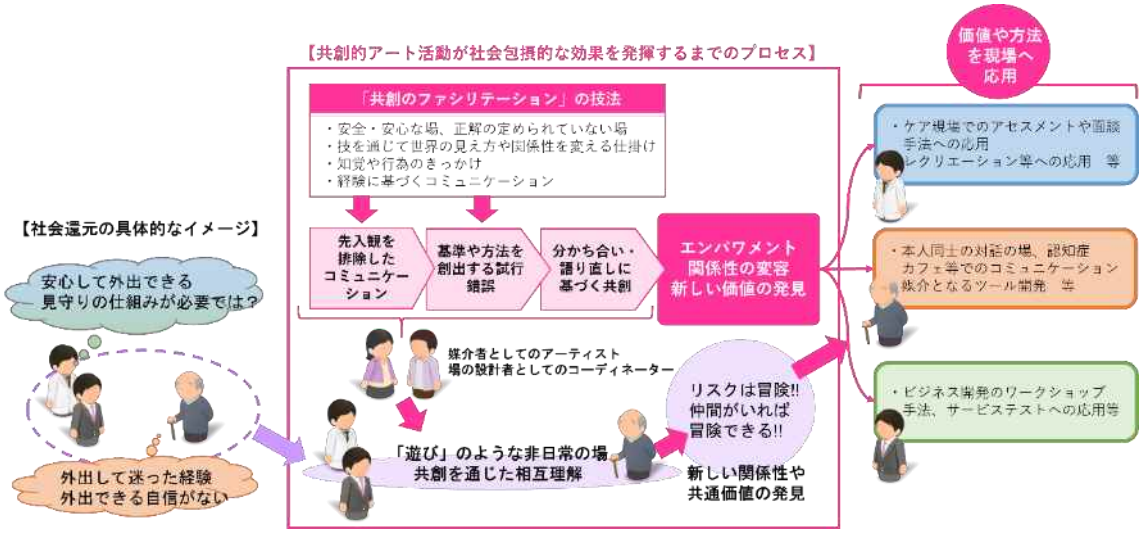
○社会モデルを実現するうえで、検証すべき課題として「認知症にまつわる人と人との関係性」を設定する。認知症にかかわる課題解決の活動や製品・サービス開発は現状でも行われている。しかし、その現場では「認知症当事者は問題を抱えている」という前提認識による関係性からコミュニケーションが行われているために、当事者のエンパワメントにつながらず、かつ本質的な課題に基づかない解決策が創出されかねない。

○本プロジェクトでは、上記の課題に対応して、関係性の変容と新しい価値の共創を促進する技術シーズとして、共創的アート活動を組み込む。プロジェクトでは複数の共創的アート活動のトライアル実施を行うことで、認知症の人とその支援者等の間に起きる関係性や意識の変化や、その変化を及ぼす条件・要素を検証する。

○抽出された共創的アート活動の条件・要素を、認知症の人の関係する既存の現場へと応用する可能性試験を実施する。既存の現場となるフィールドとして、①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場、の３つを想定して、関係するステークホルダーとともに、新しい価値に基づくサービスの共創を試みる。

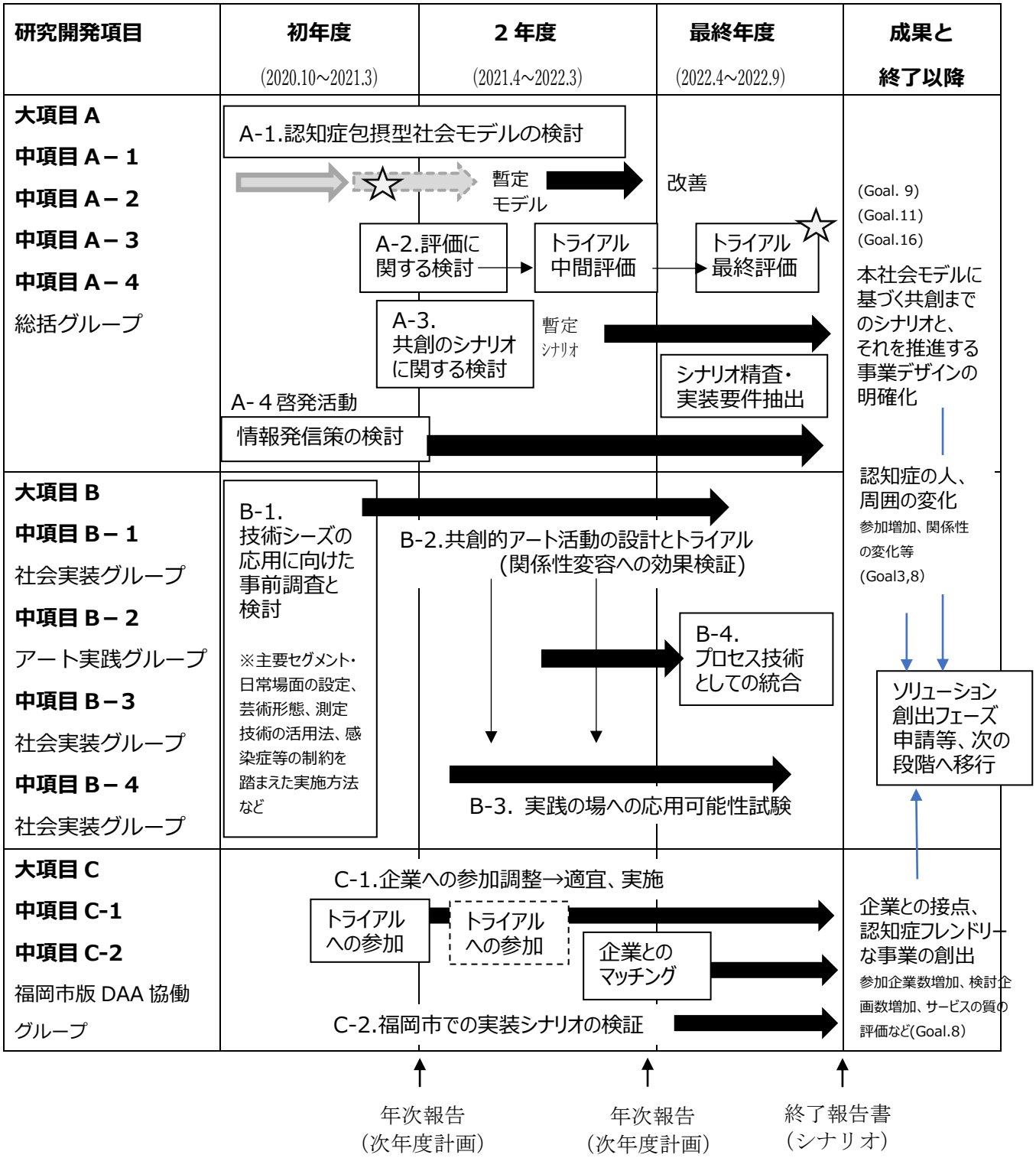
○これらのトライアル活動及び現場への応用可能性試験を通じて、社会モデルに至るまでのシナリオ仮説の修正や、プロセス技術の明確化、それを実現していくための事業モデルの検討を行う。

○社会モデル、シナリオの具体化とともに、主要メンバーが持つ福岡県内のネットワーク、協力組織が持つ全国的なネットワークを活用した情報発信・交流を実施することで、他地域展開を行う。



２－２．実施内容・結果

（１）スケジュール（研究開発期間中（２４ヶ月）のスケジュール）



（２）各実施内容

今年度の到達点①

（目標）認知症包摂型の社会モデル仮説ならびに共創を促すプロセス技術の在り方の検討

実施項目①-１：運営ミーティング、個別協議の実施。

実施状況： 開始直後、研究代表者を中心とした運営ミーティングを重ね、提示したいビジョンづくりに注力した。現状調査・事例調査の結果と共に、福岡市の主要関係者とともに検討する全体会議の企画作りを実施した。また、認知症カフェなど、福岡市内で認知症関連の活動がどのような状況にあるか、公開されている情報を中心に収集した。同時に、計画策定当初には交流が図れていなかったステークホルダー（福岡県若年性認知症コーディネーター、認知症の人と家族の会福岡支部）との交流、接点づくりを試み、今後の協力体制の足掛かりとした。

今年度の到達点②:

（目標）共創的アート活動の位置づけを明確にし、共創的アート活動のトライアルを実施

実施項目②-１：共創的アート活用およびプロセス技術に関する検討会の実施

実施状況：「共創的アート活動」として、ヒアリング調査の企画、技術シーズの活用方法とトライアルの企画（場の検討、アーティストとの調整）を検討した。その中で、本プロジェクトにおける共創的アート活動の位置づけの明確化を図った。

実施項目②-２：共創的アート活動の応用に向けた事前調査

実施内容： 福岡市でのトライアルに向け、先行事例に関する文献調査に加えて、関連するアート活動の実践者・有識者へのヒアリングを行うと同時に、福岡市での介護従事者に対するヒアリングを実施した。

実施項目②-３：共創的アート活動のトライアル

実施内容： 検討会での結果を踏まえて、認知症の人とその関係者とともに行う共創的アート活動のトライアルに向けて、まずは地域で共創的アートと認知症の人を含めた現場をつなぐ担い手として、現場でアート活動を実践している、または関心を持っている介護従事者に焦点を当てて、共創的アート活動体験会として、オンラインで実施した。また、その可能性について、意見交換を行った。

実施項目４：実践の場への応用可能性試験に向けた企画検討

実施内容： トライアル成果を踏まえ、実践の場として、①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場の３つを想定した共創の仕組み（プロセス技術）について検討を始め、次年度の「マネジメント検討会（仮称）」の準備を進めた。

（３）成果

今年度の到達点①

（目標）認知症包摂型の社会モデル仮説ならびに共創を促すプロセス技術の在り方の検討

実施項目①-１：運営ミーティング、個別協議の実施。

結果：運営ミーティング、および個別協議を重ねる中で、本プロジェクトが目指す認知症包摂型社会モデルを具体化させるに当たって、以下のように検討する必要がある論点を整理することができた。また、福岡市・福岡県内で実施されている認知症の人向けの集いの場、アート活動 の情報収集を図った。情報収集を試みる中で、新型コロナウイルスによる影響を加味しても、認知症の人の社会参加に関わる取り組み情報につながりにくい状況が見られた。一方で、認知症カフェにおけるアート活動や認知症をテーマとした活動への美術系施設の参加等、福岡市内にも親和性のある活動が生まれており、当事者に留まらず、社会資源側からみても、ニーズが高まっている様子が見受けられた。そこで、関係団体（集いの場、認知症の人と家族の会等）との交流にも取り組んだ。ゆるやかにでも接点を持ち続けることで、今後、福岡市近辺で活動を波及させていく上で重要となるソーシャルキャピタルの構築、活性化を狙ったものである。

成果：令和２年度の検討経過を踏まえて、認知症を包摂する社会に向けたシナリオを作成する上で着目すべき、または取り組むべきポイントを以下のように整理。

- 社会モデルとしての方向性
  - 認知症フレンドリー社会を目指すうえで、認知症包摂型の社会として広く備えるべき関係性と、その要素に関する実践的な言語化を図る
  - 認知症フレンドリー社会において認知症を包摂することの位置づけを明確にした上で、より広い共感を引き出せるようなシナリオの軸となるストーリーの構築を目指す
- 具体的なポイント
  - 本 PJ が目指す社会のあり方を示すうえでの現状分析の深堀を進める
  - 現状から目指す社会像に至るまでシナリオにおいて、既存の捉え方・関係性、問題構造のフレームを質的に変容させる上で、共創的アート活動を軸としたプロセス技術の役割、要素を明確化させる
  - 一般的に認知症に関するネガティブ印象（スティグマ）先行する中で、見えにくくなっている認知症に関わる可能性を伸ばしていくメッセージと、そのために必要な要素を具体化する
  - 認知症に関わる多様なステークホルダーへの発信に向けて、目指す認知症包摂型の社会に対する理解と共感を促す上で、効果的かつ具体的な示し方、発信の場を検討する（トライアル等の結果・反応を取り入れる等）

今年度の到達点②:

（目標）共創的アート活動の位置づけを明確にし、共創的アート活動のトライアルを実施

実施項目②-１：共創的アート活用およびプロセス技術に関する検討会の実施

結果：事前調査、トライアルの効果的な推進につながった。

成果：事前調査の結果を踏まえて、共創的アート活動のトライアル企画の具体化、および本PJにおける共創的アート活動の位置づけの検討を進めることができた。

実施項目②-２：共創的アート活動の応用に向けた事前調査
結果：認知症に焦点を当てた共創的アート活動のトライアルを企画するに当たって、共創的アート活動が関係性の変化に与える効果や、介護現場の実践者視点で期待されることを明確にさせていくことを目的に事前調査を行った。

1- 先行事例に関する文献調査

事例の収集を行い、主だった事例は以下の通りとなる。

- 本プロジェクトが目指す社会のあり様を示すうえでの現状分析の深堀
- アーツ前橋　表現の森「石坂亥士・山賀ざくろ×清水の会えいめい」
- 東京文化会館　「音の砂場」
- 仙台富沢病院　演劇情動療法
- NPO 法人　芸術資源開発機構（ARDA）「初めてのオンライン・アートワークショップ、高齢者に向けて～遠隔から体奏家・新井英夫さんとからだをほぐす～」
- 日本センチュリー交響楽団
  「音楽を通して高齢者の生活の質の向上を目指す国際連携プログラム」、「お茶の間オーケストラ」など
- オイ・ボッケ・シ（老いと演劇）
- オンライン回想法（福岡市ミュージアム・シニア・プログラム）

2- 関連するアート活動の実践者・有識者へのヒアリング

令和 2 年度はアートマネジメントの視点を中心に、以下の実践者、有識者へのヒアリングを実施し、実際の状況、意見を収集することができた。

- 今井朋氏（アーツ前橋　学芸員）
  収集した事例の中で、福祉施設での取り組みを行っているアーツ前橋（群馬県）にコンタクトをとり、活動実施に至るプロセス・関わった方々（高齢者の方やご家族、施設のスタッフ等）の変化・成果や課題等を伺った。
- 大澤寅雄氏（ニッセイ基礎研究所　芸術文化プロジェクト室　主任研究員）
  文化政策やアートマネジメントの調査研究に取り組まれている同氏に、アート活動の運営やマネジメントにおけるポイント、アーティストとの関わり方、参加者（専門職側）へのアプローチについて伺った。
- 長津結一郎氏（九州大学大学院芸術工学研究院 助教）
  障害のある人などの多様な背景を持つ人々の表現活動に関する実践を通して、その理論化にも取り組む同氏に、目的性が強い本 PJ でのアートマネジメントの難しさ、専門職へのアプローチ方法、思い浮かぶアーティストについて伺った。

3- 福岡市での介護専門職に対するヒアリング

トライアル先や実現可能性を検討する上で、市内での介護専門職へのヒアリングを実施し、感染症の状況を前提に、可能性・注意点に関する意見を収集できた。

- 党一浩氏、上坂喜美紀代氏との意見交換（プロジェクト実施協力者、介護専門職、福岡市認知症ライフサポートワーカー[1]）
- 村瀬孝生氏（宅老所よりあい 代表等）

成果：各種調査の結果から、以下のような論点があげられた。

1- 先行事例に関する文献調査

文献調査から関連する事項として、以下のような傾向を整理した。

- 主に美術館やアート NPO が実施主体となり、アーティストとともに介護老人福祉施設を訪れ、認知症の人や施設利用者を対象に、独自のアートプログラムを実施しているものが多い。
- アートプログラムの参加者にどのような変化や効果があったか、心理学の研究者等と協力し、独自の指標を用いて検証している事例もある
- 認知症の人や施設利用者本人の短期的な変化を検証したものが多く、介護施設のスタッフや認知症の人の家族の変化、関係性の変化について、中・長期的な変化を検証している事例は少ない。これには様々な要因があるが、①アートプログラムが認知症の人や施設利用者にもたらす変化や効果を測ることが第一の目的であることが多い、②アートプログラムの予算や実施形態が単年度で、長期的・連続的な実施・調査が難しい、③介護施設の規模や形態によっては、介護職員や家族にアプローチすることが難しいなどの理由が挙げられる

2- 関連するアート活動の実践者・有識者へのヒアリング

アート活動に関連する事項として、実践とアートマネジメントの視点から重要な要素を以下のように整理した。

- アートプログラムの実施組織（アーティスト、美術館や劇場のスタッフ、検証チーム等）と介護施設とをつなぐコーディネーターのマネジメントが非常に重要
- 介護施設の規模や形態、対象者の設定によって、プロジェクトの進めやすさは大きく異なる（例えば、特養は施設スタッフや家族への働きかけがかなり難しく、小規模多機能やデイサービスは比較的実施しやすい等）
- 専門職や家族（支える側）が変わることが重要であり、それは「ケアする人のケア」とも言える。変化には時間がかかるものであり、単発ではなく継続的に活動を実施し、参加してもらうことが大切。
- 認知症の人とアーティストとの関係は、それぞれの個性がある。関係性の変化のモデルを再現可能にしていくためには、様々なアートの分野、実施対象・回数・人数など、パターンを丁寧に見ていく必要がある。

3- 福岡市での介護専門職に対するヒアリング

介護現場の視点で期待されている事項に加えて、実現する上での実践上のポイントについて、以下のように整理した。

- 感染症対策に関すること：できる限り協力したいが、介護施設のコロナ対応は厳しく、また家族への理解を得られないということからも、現場に訪れてワークショッ

[1] 福岡市事業で養成された認知症の人の良き伴走者として地域で活躍できる人材

プを実施するのは難しい。ただ、家族との信頼関係が強い小規模多機能のような介護施設では、実施できる可能性がある。オンライン活用も重要となる。

- 介護現場で実施する意義：介護現場は日々のルーティンをこなし、安定的な状態を保つため、科学的な再現性が求められるが、日々の暮らしは本来再現性のないものであり、計画通りに行かないアート的な側面がある。介護現場はそのジレンマに悩んでおり、アート的活動を通してそうした状況について介護職員と一緒に考え、整理することで、新たな動きにつながるのではないか（リフレクションの必要性）。
- 認知症の人は過去や未来がおぼろげになっており、五感で懸命に「今」を捉えている中で、介護する側は、30 分後に相手が落ち着くかという未来を見ていて、五感をあまり発揮していない。アートに触れることが、介護する側の五感を発揮する機会になるといい。

実施項目②-３：共創的アート活動のトライアル

結果：事前調査の結果と、新型コロナウイルスが社会へもたらす現状を加味して、本プロジェクトが試みる活動への協力者を広く集うためにも、先んじて提示・共有可能な実施ケースを創ることが重要であると判断し、共創的アート活動を試行できる具体的なフィールド探索を優先することとした。そこで、令和２年度としては、こうした共創的アート活動に関心をもつ介護従事者（現場の実践者）にターゲットを絞りこみ、共創的アート活動の応用企画を創る部分から協働できる共感者を得ることを大きな目標とした。そこで、オンラインでの共創的アート活動の体験を共有する機会を企画、実施することができた。

＊実施までのプロセス＊

1- プログラムづくり

①協力をお願いするアーティストの決定

体験を共有する機会としてプログラムを企画するに当たり、以下の２つの点から、体奏家・ダンスアーティストの新井英夫氏に依頼することにした。

- 新井氏は、体奏家・ダンスアーティストとして、舞台演劇・公演活動や、乳幼児～高齢者の方まで幅広い対象に向けた「からだからダンスを発見する」ワークショップを展開しており、国内外で活躍している。
- 介護施設で認知症の人を対象に身体表現ワークショップを実施した実績も数多く、またコロナ禍において対面でのワークショップ実施が難しくなる中、オンライン会議ツールを利用した介護施設でのワークショップの経験が持たれていた。

新井氏の快諾後、打合せの中で今回のプログラムに込めるポイントを以下のように設定することとなった。

- 今回のプログラム参加者を医療・介護従事者を中心としたことから、認知症や障害のある人を想定したプログラムだけでなく、オンラインでのアートワークショップの可能性を様々な形で体験してもらえるよう、幅広いプログラムを盛り込んだ。
- 今回実現したいアート活動は、参加者が共に作り上げるものである。しかしながら、一般的に「アート」というと、「（個人・チームの）高い感性とスキルに基づく芸術性な表現に限られるもの」というイメージのもと、距離感を覚える人もいる。そこで、新井氏からの提案で、タイトルに「アート」という言葉はあえて使わ

ず、「からだを奏でる」「身体表現コミュニケーション」「ほぐす・つながる・つくる」といったキーワードを使うことで、参加の垣根を下げる工夫を行った。

- 参加者は、肩書や所属ではなく、「今日呼ばれたい名前（あだ名）」を表記し、フラットなコミュニケーションを行えるよう場を設定した。
- 参加者が各施設で実際に取り組むならどのような形態や条件が考えられるかイメージしやすいように、新井氏がオンライン会議ツールを利用して介護施設で実施したワークショップでの工夫や経験談を、動画を用いて紹介してもらった。

②プログラム構成の検討（体験会後の事例紹介、意見交換の場の設定等）

今回のオンライン体験会では、アーティストを交えて、体験後に参加者の間で意見交換する時間を設けることとした。共創的アート活動の実施へ共感し、協働を受け入れてくれる人とのつながりを構築するためにも、体験したことから前向きに意見を交わす時間を設けることが重要なものと考えたためである。また、アートが持つ体験への理解を深めるにも、体験したことを振り返る機会を合わせて設定することで、体系的な理解が進むと考えられる。そこで、アーティストが進行する体験型ワークショップの直後に、主要な参加者とプロジェクト関係者とでリフレクションする機会として、

1. 共創的アート活動の意義、可能性をどこに感じるか
2. 新型コロナウイルスの状況下で実現可能な形態はどのようなものか

等、体験後の対話の場を設定した。ここから継続した関係性につなげることができるよう、プログラム趣旨・構成を強く意識して具体化を図った。

■意見交換で確認したいと考えたテーマ

- 趣旨を踏まえて、有効に思える共創的アート活動の在り方をどう感じるか（内容、プログラム構成、活動の位置づけ等）
- コロナ禍でも安心して開催するための形態、条件はあるか／どういったものか（オンラインでアートを実施する際のハードル）
- 新井氏の事例を受けて、「こんな事ができるかも！と思ったこと」、「楽しいと感じたイメージ」の共有
- 認知症の人と一緒にやると、認知症の人や支援者はどんな気持ちになるか、どんな変化がありそうか、見え方が変わりそうか
- 具体的にどんな関係性の変化の可能性があるか（イベント直後の変化＋その後の関係性の変化）
- アートを体験して感じたことや起こったことは普段の現場と同じか、違うか。違うならどんなふうに日常や現場に取り入れられそうか？（レクリエーションや介護予防との違い）

③オンライン企画趣旨の具体化

以上の検討結果を踏まえて、呼び掛け文、プログラムを作成した。特に、共創的アート活動に関する体験を軸としつつ、新型コロナウイルスの影響により、対面による活動の目途が定まらない中で、①オンラインでの②共創的アート活動の可能性について、意見を交わす内容とした。また、途中で２グループに分かれて感想を共有する時間を設けることとしたため、広く利用され、グループ分けが可能なオンライン会議ツールとして、ZOOM Meeting を用いた。

○呼び掛け文

長寿を実現した日本では、認知症は誰もが何かしら関わりを持つテーマと言えます。そのような中で、「支援される認知症の人」と「支援する人」という固まった関係性のみでは、生活の中で対処しきれない課題が散見されるようになってきました。そこで、私たちは、誰もが双方向に自由に発言・表現し合える地域社会を目指して、新しいアクションが必要だと考えています。

そこで、認知症の人を含め、そこに関わる人と人のつながりを新たに紡ぎだすために、「参加者それぞれの状況、立場に縛られず、ともにアートを創る」という行為・場が大きな可能性を持つのではないか、と考えています。一重にアートと言っても、いろいろな種類、形態がある中で、特定の人だけではなく、誰もが参加できるような仕立てが出来るものです。しかし、その仕立て方次第で、その場限りのもの、特定の人しか関われないもの、関わった人が何も得られないものになってしまうこともあり得ます。また、このコロナ禍では、対面で行うリスクも大きく、オンライン活用など、特有の制約に対する工夫も必要となります。

今回は、そうした目的意識と、実際に行う上でのハードルを意識した上で、オンラインで共創的アート活動体験を共有し、関係性を紡ぎ直す上で有効的な在り方とともに、コロナ過でも安心してできる環境について、一緒に考えたいと思っています。

④プログラム構成

最終的に、タイトルを「からだを奏でる身体表現コミュニケーション ～ほぐす・つながる・つくる～」（認知症の人を含めた人と人のつながりのつむぎ方を考える会@オンライン）として、以下のプログラ構成とした。

13：20　スタッフ、参加者入室（ZOOM）
13：30　イントロダクション
13：40　１部　共創的アート活動体験と、アーティストとのコミュニケーション
・アーティストとの対話　10 分
・体験　50 分
・感想の共有　10 分　（小グループで実施）
・休憩　10 分
15：00　２部　体験の振り返りと、今後に関する意見交換
・アーティストによる活動事例の紹介
・趣旨を踏まえて、有効に思える共創的アート活動の在り方は？
（内容、プログラム構成、活動の位置づけ等）
・コロナ禍でも安心して開催するための形態、条件は？

2- 事前ヒアリング

今回の共創的アート活動トライアルを呼び掛けるうえで、プロジェクトとしての趣旨を伝えること、事前にこうした活動への感想を伺うことを目的に、個別に事前説明を行うこととした。

①呼びかけ

- プロジェクト関係者のネットワークを生かしてスノーボール形式で共創的アート活動に関心を向けそうな介護従事者へのコンタクトを図った。

②事前説明

- 関心を示した介護事業者に個別に時間をいただき、事前にプロジェクト全体としての趣旨、共創的アート活動を取り入れる意図を説明し、感想を伺った。
- 趣旨に対する賛同を事前に得ることができ、ある参加者からは「アートの持つ効果として関係性の変化、情動面の変化、非日常性の側面などその可能性は感じる」「実践面で協力できることもあると思う」等、前向きな発言も得られた。

3- 体験会の実施

当日はプログラムに沿って実施することができ、多様な参加者の様子、反応を得ることができた。具体的な進行と参加者の反応は以下の通りとなる。

【１部　共創的アート活動体験と、アーティストとのコミュニケーション】

- 参加者入室時から、新井氏とアシスタントの板坂氏がマリンバや笛、太鼓など楽器の生演奏を行っていた。体験会参加者からは「体を動かすのが苦手なので、始まる前は緊張していたが、心地よい音楽でリラックスできた」という感想が聞かれた。
- 雰囲気づくりから、ともに体を奏でる活動に取り組む中でのファシリテートまで、アーティストの経験知に合わせて、相互のやりとりが創発されていった。
- 体を動かす体験では、全員で動きを真似たり、ペアで動きのやり取りをしたりと、即興による「余白をもった非言語的なやりとり」を体感できるように、以下のように６種類にわたる複数のプログラムを実施した。
    - 変速ラジオ体操（テンポを変えてラジオ体操）
    - 動きしりとり（単語を動きで表現しながらしりとり）
    - ペアでミラーリング（ペアになり、互いの動きを真似する）
    - 動きのキャッチボール
      (ペアになり、パントマイムのように空気のボールをやり取り）
    - むちゃぶりダンス（相手が全く想像しないような動きを無茶振りする）
    - 即興ダンス　動きの森（各々が自由に動き、自由に真似する）
- あえて動きが揃わないことを楽しんだり、居心地のいい動きを探したり、相手の動きや考えを想像しながら非言語でのコミュニケーションを行う体験となった。
- 振り返りの際、参加者からは「音楽もきちんと聞こえ、動きや距離感を工夫したりすることで、オンラインでもいろんな事ができるとわかった」「体を動かして気持ちいい。オンラインでもこうした体験ができてよかった」との声が上がった。

【２部　体験の振り返りと、今後に関する意見交換】

- ２部ではまず、新井氏の過去の活動事例を動画付きで紹介してもらった。
- その後、２つのグループに別れてもらい、「新井さんと一緒に考えてみたいこと」というテーマで感想や質問を話し合い、そこで出た意見をもとに、全体共有と意見交換を行った。
- 新井氏からの活動事例紹介があったことで、介護施設でアートワークショップを実施する際の具体的な対策や工夫に関する意見、質問が多く上がった（後述）。

- 会終了後、任意参加の雑談の際も、アートワークショップの体験によって起こる変化や、介護職員としての葛藤など、さらに深堀りした内容へと対話が発展した。

【意見交換の整理】

〇オンラインでアートワークショップ際の準備や工夫について

・対面で行う際以上に、入念な準備や人手が必要である。機材や通信環境の充実といったハード面はもちろん、参加者それぞれの人となりや性格、身体的制限など、事前情報、現場とアーティストをつなぐファシリテーター的役割の人も不可欠。

・参加人数や参加される認知症の人の認知機能状況等によっては、初対面でもオンラインで実施できる可能性もある。

〇レクリエーションとの違い

・アーティスト自身も想定できない事が起こるのが面白い。いつもと違うことや、ずれたり、はみ出したり、その人の内側にあるエネルギーがこぼれ出るような事ができたらいいな、と期待している。

・プログラムややることが決まっているレクリエーションと違い、今回のように自由な発想や表現ができるワークショップは、笑顔が出やすい。

・参加者から出てきた表現や反応を新井さんが丁寧に拾い、対応する様子や場作りのスキルが、介護者の参考になるのではないか。

〇非日常の体験を日常につなげる工夫

・アーティストがワークショップの中でできることは限られている。ワークショップで出てきたおもしろい発想や表現を手掛かりにして日常に取り入れ、面白がるマインドや関係性の積み重ねがあると、日常の関係性が変わるきっかけになりそうだ。

〇オンラインの利点

・普段のレクリエーションやアートワークショップの際、家族が参加することは少ないが、オンラインならば現場と家族、アーティストをつないで実施することもできる。

・コロナ禍でもマスク無しで表情を見ながら話せることも大きな利点である。

〇体を動かすプログラムの利点

・認知症は度合い、症状によって、言語的なコミュニケーションを取ることが難しい人もいれば、もの忘れ程度の人もいる。そうした違いからレクの提供にも難しさがあるが、体を動かすコミュニケーションの方法は、多くの人が楽しめ、参加しやすい。

・コロナ禍で体を動かす機会が減っている中、いい機会となる。

〇介護職員としての葛藤

・介護職員として働きながらアートワークショップを行ったこともある経験から、ワークショップ的発想でケアを行っても、ケアの日常に飲み込まれていく葛藤があり、介護職員がいつもワークショップ的発想を持ってみていくのは大変なこと。だからこそ、外部から非日常として風が入ることが大切である。

・トラブル起こさないことを求められる現場と、非日常的体験をどう融合するか。

＊体験開示の ZOOM スクリーンショット

１部：体を動かす体験

２部：意見交換（意見交換の中でも身振り手振りを交えたやり取りが見られた）

成果：体験に基づいた意見交換を通して、共創的アート活動を展開する上でのポイントを拾い上げることができた。加えて、共創的アート活動に関するオンラインでの体験会・意見交換の実施後、参加された方から今後の協力も可能である旨、連絡があった。そこで、振り返っての感想を伺う機会を設けることとした。このように、今後、共創的アートの応用実践に前向きな実践者とのつながりを創ることができた。
また、プログラム検討や、体験後の意見交換を踏まえて、参加者の属性（人となり、症状、立場等）、実施する場の状況（介護施設、地域の集いの場等）、現場が持つ期待などと照らし合わせて、より適切で効果的なアート形態・プログラム構成の選択・企画作りを柔軟に運営することが求められることが明確になった。これはアートマネジメントに関する実践者・有識者ヒアリングで得られたポイントとも整合性を持った論点と言え、本活動を広く展開する上では、こうしたアートと現場をつなぐ人材像を整理することが重要と考える。次年度以降、実践者ヒアリングと更なるトライアルを

重ねる中で、普及を促進する知見として、本プロジェクトのビジョンと適合したマネジメントのあり方を結晶化させていくことを試みる。
また、他地域展開を図る社会技術における要素でもあり、普及させる施策の検討が必要と言える。例えば、既存の社会資源を想定する場合、マネジメントを図る上で、必要不可欠な要素の見極めや、地域資源側にとってのメリットの設計が求められよう。こうした運営主体に関する検討も合わせて、次年度以降のトライアルを進めていく。

実施項目４：実践の場への応用可能性試験に向けた企画検討
成果：トライアル成果を踏まえ、実践の場として①認知症当事者参加の場、②ケアの場、③ビジネス開発の場を想定した共創の仕組み（プロセス技術）について検討を始め、次年度以降の検討体制を見直し、「マネジメント検討会（仮称）」の準備を進めた。

（４）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

当該年度の活動を受けて、次年度では以下の課題を意識して、活動を進める。

- 共感を引き出す社会モデルのあり方について
  新型コロナウイルスの影響を受けて、トライアル活動や、全体会議の実施に遅れが生じている。同時に、検討や交流を進める中で、本プロジェクトで主要な課題として設定している”関係性を変える”ことの意義を共有するには、各立場から共感を得やすいストーリー作りの必要性を痛感している。問題解決型の考え方の重要性を大前提としつつ、それまでの考え方、視点を変えていくことの重要性を共有できる形に落とし込んでいくことが求められる。また、こうした要素の具体化は個別のプログラム、および総体的な活動に対する評価指針の検討にも関わる。そのため、認知症包摂型の社会がどのような社会を目指すものなのか、より一般的にも共感を得やすいような形へと早急に編集していく必要性がある。同時に、オンライン活用も含めて、社会モデルの発信方法も検討していきたいと考えている。
- 先行した実践を活かしたストーリー構築について
  一方で、今年度のトライアルを通して、本プロジェクト活動に協働してくれる実践者との新規のつながりを構築できた。こうした共感の輪を活かして、実際のケースづくりを進めるとともに、認知症の人、支援の現場における実践者の共感を得やすいストーリーのプロトタイプを早急に創り出していく必要があると考えている。主要協力者のフィールドにて共創的アートの応用活動を実現させていくことと平行して、実際の活動から得られた成果、気づきを反映させながら本プロジェクトのストーリーの明確化を、次年度前半から意識して進めていく。
- 共創的アート活動の長期的な展開可能性について
  共創的アート活動のマネジメントにおいて、アーティストと現場の継続的な関係性の構築は重要なファクターとなりうる。しかし、新型コロナウイルスの影響で、事前の準備・企画づくりからの関係性構築が、従来の対面方式のみを前提とした形では行いにくい社会状況にある。その一方で、オンラインでの交流、非接触型でのやりとり等を活用した事例も増えつつある中で、対面交流が憚られる中でも試みることができる活動マネジメントのあり方は、恒常的に実現可能性が高いものとなる。合わせて、本質的に求められるファシリテーションのあり方を具体化させ、いまで

きることに焦点を当てつつ、共創的アート活動の長期的な展開可能性を見定めていきたいと考えている。加えて、そうしたマネジメントを行う人材像と、普及方法についても、合わせて検討していきたい。

- 共創的アート活動経験と現場のつなぎ方について
  共創的アート活動を通して各参加者が得た気づきを、認知症の人による社会参加の現場、医療・ケアの現場、ビジネスの現場といった実践の現場に落とし込む上で、アートを通して得られた体験をその場限りのものに終わらせず、形にしていく仕掛けが重要であると考えられる。令和２年度に実施したオンラインでのトライアルでは、共創的アート活動を体験したあと、リフレクションの場を設定した。このようなプログラム構成の意義、有効性を明確にしていく必要があるものと思われる。リフレクションの形態についても、活動後に単発で行う形から、活動後の継続的なつながりを通して深めていく形まで、複数のパターンが想定可能である。この点の具体化が次年度は大きな検討、試行課題であり、マネジメント検討会（仮称）等、プロジェクトの関係者、協力者の中でトライアル、対話を重ねながら、具体化を図っていく。

２－３．会議等の活動

年月日	名称	場所	概要
11月12日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・社会像に関する検討 ・役割分担の確認
12月3日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・年度内容の活動内容について
12月9日	共創的アート活動検討会	ZOOM Meeting	・共創的アート活動に関する年度内の進め方、企画内容について
12月16日	協力者との意見交換	ZOOM Meeting	・本事業展開に関する協力者（党氏・上坂氏(介護従事者)）との協議
12月19日	意見交換	福岡県クローバープラザ	・福岡県若年性認知症支援コーディネーターとの意見交換
12月24日	活動紹介	福岡市ふくふくプラザ	・認知症の人と家族の会へのプロジェクト内容の紹介
2021年 1月13日	共創的アート活動検討会	ZOOM Meeting	・進捗報告（ヒアリング状況、フィールドの相談状況等） ・協力依頼するアーティストについて
2月4日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・活動の進捗状況についての共有
2月6日	打合せ	ZOOM Meeting	・共創的アート活動のトライアル実施に関する打ち合わせ①（体奏家・ダンスアーティスト 新井氏）
2月15日	運営ミーティング	ZOOM Meeting	・活動の進捗状況についての共有
2月16日	打合せ	ZOOM	・共創的アート活動のトライアル実施に

		Meeting	関する打ち合わせ②（体奏家・ダンスアーティスト 新井氏）
2月17日	オンラインミーティング	ZOOM Meeting	・オンライン体験会の運営について
2月19日	ミーティング	九大大橋キャンパス	・活動の進捗状況についての共有 ・画像解析技術について
2月21日	オンライン体験会（共創的アート活動）	ZOOM Meeting	・からだを奏でる身体表現コミュニケーション ～ほぐす・つながる・つくる～(認知症の人を含めた人と人のつながりのつむぎ方を考える会@オンライン)

３．研究開発成果の活用・展開に向けた状況

令和２年度は、新型コロナウイルスの影響に左右され、実際の活動は慎重に進めざるを得ない状況となった。一方で、オンラインでの体験会等を通じて、小規模ながら共感づくりや共創的アート活動によるエンパワメントの可能性、実施課題の抽出等を行うことはできた。次年度は、得られた共感を確かなものとして、さらにはそこから広く関係者へと共感の輪を広げられるよう、トライアル企画を具体化して、形にしていく予定である。そうした実際に共有できるトライアル成果を生み出したうえで、広く協力者を交えた全体会議や、主要なステークホルダーとの交流の拡大、一般を対象とした対外発信へとつなげていけるよう、情報整理を進めていく。

４．研究開発実施体制

（１） 総括グループ

グループリーダー：内田直樹（医療法人すずらん会たろうクリニック　院長）

役割：認知症包摂に基づく新しい社会モデル、および共創のシナリオ創出

概要：認知症の人を含めて自由に発言（表現）し合い、多様な人と共創できる社会を「認知症包摂型社会」と捉え、そのモデルの具体化を図り、そこで刷新された認知症に関する社会関係に基づいた「共創に向けたシナリオ」の作成、評価、啓蒙を図る。

（２）プロセス技術の検討・実装グループ（社会実装グループ）

グループリーダー：長島洋介（ラボラトリオ株式会社　マネージャー）

役割：関係性の変容と新しい価値の共創を促進する仕掛け（プロセス技術）の可能性試験と開発

概要：認知症包摂型社会モデルのビジョンに則り、関係性の変容と新しい価値の共創を促進するために、技術シーズとしての共創的アートおよび動画解析技術による応用行動分析マネジメントを組み込んだ実践を企画・実施し、福岡市にて可能性試験を行う。その際、既存の現場となる①認知症当事者参加の場、②ケア

の場、③ビジネス開発の場、の３つの出口を想定する。また、これらの可能性試験を通して、関係性の変化を及ぼす条件・要素を抽出して、他地域でも展開可能なプロセス技術を開発する。

（３） 共創的アート実践グループ（アート実践グループ）

グループリーダー：中村美亜（九州大学大学院芸術工学研究院　准教授）

役割：共創的アートを活用した地域実践の立案・実施と、効果検証

概要：関係性を刷新させる仕組みの軸とする共創的アート活動について、福岡市の認知症を取り巻く現状に適したアート形態・企画をトライアル的に実践し、関係性の変容を興す場を創出する。加えて、トライアルの場で生じた実際の関係性、考え方、価値観の変化に対して、応用行動分析マネジメント技術等を用いて、定性的、定量的に評価・検証することで、より適切な共創的アートの組み込み方を検討する。

（４） 福岡市版DAA協働グループ（DAA協働グループ）

グループリーダー：笠井浩一（福岡市保健福祉局高齢社会部認知症支援課、課長）

役割：プロジェクト活動とDAA構想プラットフォームに参画する企業との調整

概要：福岡市版DAAにおいて構築してきたプラットフォームに参画する企業に対して、各種トライアルへの参加への調整を行い、必要に応じて、新しい考え・価値と企業の持つシーズとのマッチングを図る。

５．研究開発実施者

総括グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
内田 直樹	ウチダ ナオキ	医療法人すずらん会	たろうクリニック	院長
笠井 浩一	カサイ コウイチ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	課長
中村 美亜	ナカムラ ミア	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
長島 洋介	ナガシマ ヨウスケ	ラボラトリオ株式会社		マネージャー

プロセス技術の検討・実装グループ（社会実装グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
長島 洋介	ナガシマ ヨウスケ	ラボラトリオ株式会社		マネージャー
南 伸太郎	ミナミ シンタロウ	ラボラトリオ株式会社		代表取締役
倉光 聡美	クラミツ サトミ	ラボラトリオ株式会社		アシスタント

共創的アート実践グループ（アート実践グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職（身分）
中村 美亜	ナカムラ ミア	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
尾方 義人	オガタ ヨシト	国立大学法人九州大学	大学院芸術工学研究院	准教授
宮田 智史	ミヤタ サトシ	非営利活動法人ドネルモ		事務局長
櫻井 香那	サクライ カナ	非営利活動法人ドネルモ		職員
迫田 貴子	サコダ タカコ	非営利活動法人ドネルモ		職員

福岡市版DAA協働グループ（DAA協働グループ）

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 （身分）
笠井 浩一	カサイ コウイチ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	課長
松村 むつみ	マツムラ ムツミ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	代表取締役
矢野 邦弘	ヤノ クニヒロ	福岡市	保健福祉局高齢社会部認知症支援課	活躍推進担当

６．研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

６－１．シンポジウム等

年月日	名称	主催者	場所	参加人数	概要

６－２．社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

（１）書籍、フリーペーパー、DVD
・特になし

（２）ウェブメディアの開設・運営、
・特になし

（３）学会（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等
・特になし

６－３．論文発表

（１）査読付き（　０　件）
●国内誌（　０　件）
●国際誌（　０　件）

（２）査読なし（　０　件）

６－４．口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

（１）招待講演（国内会議　０　件、国際会議　０　件）
（２）口頭発表（国内会議　０　件、国際会議　０　件）
（３）ポスター発表（国内会議　０　件、国際会議　０　件）

６－５．新聞報道・投稿、受賞等

（１）新聞報道・投稿（　０　件）
（２）受賞（　０　件）
（３）その他（　０　件）

６－６．知財出願

（１）国内出願（　０　件）